

素晴らしい須走を知りたい!

「すばらしい隊」養成講座 第1回講座概要

第1部：座学 巡拝の道・須走の町を知る

■日時

令和2年9月26日（土）9時～12時

■場所

須走コミュニティセンター 会議室

■講師

石橋 良弘 富士山東口本宮 富士浅間神社 宮司

■講義概要

1. 神社神道とは？

- －神社＝神道は教えではない道。自分自身を高める・律する、それを持ちさらに自分を研さんしていくという意味合いが込められている。
- －例大祭等の祭典・神事は道ではなく宗教儀礼だが、日本古来の自然崇拝・成長儀礼・祖先崇拝などがベースになっている。神道には「こうしなければならない」はなく、日本人が持つ伝統や慣習を宗教的に当てはめると考えると分かりやすい。天神地祇やおろずのかみは八百萬神である。世界に存在する多様な神様の別名、総称し、天の神様・地の神様と言う。神道はキリスト教や仏教等のような教典・教義がほとんどない。全国に約8万の神社があるといわれ、それが明治に政策の上で一つの団体となったが、元々は地域の神社があった。それぞれの神社で色々な作法やお祭りがある。今はどこでも二礼二拍手一拝の基本的な参拝作法があるが、これも明治になって統合的に整備された。出雲神社は二礼四拍手一拝、伊勢神宮は二礼八拍手一拝である。富士講・扶桑教は教派神道で神社とは違う神道になる。開祖が存在し教典・教義があり、教義に基づいて信者がご奉仕している。

2. 神社神道の中心

- －自然崇拝（対象が天神地祇）、アニミズムである。国、地域の信仰の中心、要である。畏敬の念、信仰の対象が山や海、太陽や風など自然や自然現象である。古来より農耕民族で海洋国家であり、山の恵みや海の恵みを頂いている。豊作の年もあれば凶作の年もあるのが、神様からの恵みを頂ける時もあれば、ご機嫌を損ねている時もあるなか信仰が生まれている。太陽の神は天照大神。山の神、富士山の神、御岳山、大神神社の三輪山。海ならば九州の宗像大社や大阪の住吉大社。海は漁業だけではなく船の交通安全という事もある。自然と共存する宗教である。山宮浅間神社は御社殿がなく、富士山が正面に見える場所、富士山を拝し祈れる場所である。大神神社は大きい山と、御社殿が別があり、山全体をご神体とする。
- －祖先崇拝（対象がご先祖様）。家族や地域の信仰の要となる。ご先祖を大切にする習慣は日本人固有である。死んだ人は残された子孫の守り神になると考えられてきた。例えば、皇室の先祖が天照大神、有力貴族、藤原のご先祖が天兒屋命（あめのこやねのみこと）、神様と人間が繋がっているという考え方が先祖信仰につながっている。一般的にはお寺で葬式をする事は多いが、須走では神葬祭で神式の葬式である。亡骸にとどまった魂を仏教でいう位牌、御霊代に移し、霊璽（れいじ）、御霊代からご家族をお守りいただくという信仰の形がある。先祖を大切に行事で彼岸やお盆など法事があるが、元々日本人が持っている文化である。祖先崇拝は、東京の靖国神社がある。須走



の浅間神社の隣にある須走護国神社は明治以降の色々な戦争で亡くなった御霊をお祀りしている。須走護国神社は須走出身者の戦没者、25 藩士がお祀りしている。昨日は彼岸明けでその前日 23 日には須走護国神社の秋分祭、秋のお彼岸のお祀りした。須走浅間神社の境内には祖霊社があり、須走の地域の氏子さんの御霊をお祭りする小さな神社があり、秋分の日にご奉仕する。

- 一成長儀礼。家族と人生の信仰の要。安産・初宮・七五三・厄払・還暦など人生の節目に神様に報告し、お守りいただくもの。室町から江戸時代の神仏習合で現在の形になった。神社、お寺のどちらで行うのかはそれぞれの信仰、考えでいい。安産は子供が無事に生まれるように、初宮は子供が生まれて、ここまで成長をお守りいただいてありがとうございますという報告、七五三もその延長線で、ここまで成長しましたこれからもよろしく願います、ということ意味である。厄年は男性が仕事で請け負う責任を持つ 40 代前半、女性は出産の適齢期で神様のお力を頂く 30 代前半。厄という字は、今は危ないこととの意味だが、昔は役に立つの厄。世間的に役に立つ時期だから。還暦は 60 歳、数えて 61 歳。生まれた干支に一周してくる。干支の時、甲・乙・丙・丁という漢字をつけるのはご存じ？今年令和 2 年は子年の庚の年。これが 60 年後にまた庚子年がくる。干支が 12、甲・乙・丙・丁が 10、その最小公倍数が 60。60 年したらまた自分の干支に戻ってくる。人生 1 周して、そこから新しい生まれ変わりの年でもあると考えられているので、還暦は大切にされている。
- 一参拝作法。服装はその時々で丁重にご祈禱する時は、正装。散歩であれば砕け過ぎない格好であれば十分。鳥居は神社と俗世界の境。神様の土地に入るので神様に失礼しますという意味合いで神様に頭を下げる。参道の歩き方は真ん中が神様の通り道だから歩いてはならないというのは一般的である。左側、右側通行なのかは神社で変わる。一般的には左側通行が多いのは左側に手水舎があるから。右側に手水舎がある場合は、右側を歩く。須走浅間神社は左側に手水舎、伊勢神宮は右側に手水舎があり、五十鈴川がある。最短距離、便がいい方を歩くと考えていただければよい。手水は柄杓を用いての作法。現在は、コロナで柄杓を使用しないで水が垂れ流ししている。その状態で、両手を清め、清めた両手に水を含んで口を漱ぐ。また手を清めて終わるという作法もある。よくご案内看板を見てお参りしていただければ。お賽銭は、気持ちなので、こうしなければいけないというのはない。鈴のタイミングも決まりがない。伊勢神宮は鈴がない。珍しくない。大事なものは、二礼二拍手して真心を込めてお参りをすること。鈴を振るのは呼び鈴を鳴らす、神様が気づいて神様がお越しになったところでお供物、お賽銭をお入れする。それから自分のお願い事をするのが流れだと思っている。神社の祭礼にもつながっている。拝礼の作法は二礼二拍手一礼。礼は、90 度曲げて最敬礼して参ることがある。報賽は、返りなおしという神社の言葉もあるが、お願いするだけではなくてお願いが叶ったら神様に感謝するというのも大切なこと。人間、お願いしてありがとうと言われたらうれしい。人間に当てはまる事は神様にも当てはまる。逆に言えば神様に当てはまるから人間が真似している。神様に対しての丁重さは人間にも同じ。「親しきなかに礼儀あり」という言葉があるが、人間関係でも最低限の礼節をもって接する事が大事というのが神社参拝の中に含まれていると考えていただければよい。

3. 富士浅間神社の神様

- 一主祭神：木花咲耶姫命、富士山の神様。全国の浅間神社は 1300 社ほどあるが、どの浅間神社も咲耶姫命。そうでないところも一緒に咲耶姫命をお祀りしている。
- 一相殿神：大己貴命、彦火出出見命。
 - ・大己貴命は、出雲大社の神様、大国主命の別名。若いころのお名前を大己貴命。なぜ若いお名前でお祀りされているのかは不明。一説には大山祇命(おおやまつみのみこと)、咲耶姫のお父様を

お祀りしていたのではないかとされているが、江戸時代の書籍からも大己貴命をお祀りしていた。大己貴命は日本の国土を開拓した神様。須走は、昔から富士山の噴火で火山灰を被る地域、なのでその復興のための神様という考え方もできる。

- ・彦火出出見命は木花咲耶姫命の子。「山幸彦と海幸彦」の神話の山幸彦。山間の産業の守り神であると同時に、火中出産の神話があるが、その中で小屋の火が鎮まるときに生まれたので鎮火の神様である。三柱(木花咲耶姫命、大己貴命、彦火出出見命)を合わせて富士浅間大神とお呼びしている。浅間神社によってお祀りしている神様が異なっている。

4. 須走口の特徴

- 一須走地域の郷の守りる氏神様、産土神社であり、富士山の信仰の要となる神社である。駿河国と甲斐国を結ぶ須走において、鎌倉往還の道中の守り神様でもありと考えられている。遠方から崇敬を集める崇敬神社、氏神神社2つの側面がある。須走神社は、西暦802年の噴火が収まるように祈りをささげた場所に建てられ、富士山の鎮火、富士山の神様のお力を頂く神社でもある。富士山への登山の神様であり、鎌倉往還のような道の神様でもある。富士講や弘法大師の山岳修行の時に使われた地域であり、交通の要衝とはそういうところなのかもしれない。交通の機械化、バスや馬車鉄道、自動車がいち早く普及した地域。信仰、文化の面で重要な地域であったと考えられている。創建年代は807年、大同2年。最初から登山道の出発点として作られた神社ではない。富士登山、富士山信仰の最盛期に、神社から登山道が開かれた。戦国、室町時代には須走口という文言が書物にあり、当時の仏像も出土しているので昔からある登山口であると考えられている。鎌倉往還の宿場町なので旅館が多くあり、富士講の方々もお世話した。北口富士吉田では御師の方の大きな宿泊所でお世話をしている。須走は旅館と兼用で御師があり、それ以外でも富士講で来られた人の世話をしていたと記録がある。須走は珍しい地域。神社界だと有名な平田篤胤(ひらた あつたね)も若い頃、須走で泊まり、富士登山をした記録がある。現在、その末裔も旅館業をしている。
- 一登山道に関連する神社に胎内神社、古御嶽神社、野中神社、迎久須志之神社がある。いずれも須走浅間神社で管理している。野中神社は昔、大日堂という寺だった。これは地域の区長会が主宰している神社でご奉仕させていただく地域に根付いたものになっている。現在、富士山の登山道に関連する神社としては、富士山本宮浅間大社、北口本宮富士浅間神社、川口浅間神社、須山浅間神社、二橋浅間神社がある。それぞれ富士吉田口、富士宮口、御殿場口、河口湖口の登山道の出発点である。特に山梨では五合目に古御嶽神社、昔は二合目に御室神社があり、登山道中に神社があることは珍しいことではない。ただ、須走の特徴は、登山道中にある神社も須走浅間神社で守っている。手入れやお祭りがあれば我々神主が登ってお祀りをしている。五合目は、毎年8月17日に車で行って、古御嶽神社の前で六合目の胎内神社と九合目の迎久須志乃神社を遥拝という形で一緒にお祀りをしている。資料の写真は神社に残っている昔の迎久須志之神社。色刷りは現在の神社。九合目は胸突と言われるほど急な地域。歩けば歩くほど山が崩れる。小屋を閉じて20年になるが、この間どんどん崩れている。外国人登山者も多く、九合目も見晴らしがいいのでご来光を見る方もたくさんおり、屋根の上に登ってご来光を見る方が絶えない。その結果、どんどん荒廃してしまっている。できれば今後、いい形に装いを整えたいと考えている。
- 一須走では明治期の神仏判然、廃仏毀釈に伴い葬儀が神式となった。お寺が3つあったが、明治時代に神道に変わった。国の宗教が神道になる時全てのお寺が須走から退いた。その時にみなさんが改宗した。神道のお墓は角柱でてっぺんが平ら、剣に見立てて三角になっている。お墓はお寺さんの形になっている。神道のお葬式ではお線香をあげないが、須走に残っている文化では法事の時、玉

串の後お線香をあげる方もいる。昔からのお墓にはお線香をあげる所がある。須走の文化なので、ぜひやっていただきたいとご案内する。その時に神式になったが、ご奉仕していたのが扶桑教という富士講の一派。神社の神主は葬式はやってはいけなかった。それも神社によって違う。大きい神社はだめだが小さい神社が生計を立てていくために良い。須走神社は小さい部類だったが、いつのまにか大きい部類に変わった。そこで言うに須走の神社はやってはいけなかった。その代わりに扶桑教の方がやっていた。なぜ扶桑教の方がやっていたのかは扶桑教の教会が須走にあった。須走の街並み図、手書きのものが残っているが、現在須走の神社の駐車場の裏の鳥居をまたいで反対側に「世界遺産」という碑が建っているがそのあたりにあったという記録が残っている。登山口の入り口の所にあったという事。こちらの教会はお葬式をやっていたと考えられる。特に須走の中で小松さんという先々代の宮司さんは元々扶桑教の重役だった。また扶桑教を立ち上げる時に大申学さん、小申学さんという須走の御師の方が協力したらしい。

5. 境内の特徴

- 社殿、神門、富士塚の狛犬、信じげの滝、富士講石碑群、根上がりモミの木・縁結びの木、ハルニレ、オオエゾザクラ、火山灰の丘、社殿脇や社務所前の大杉がある。
- 社殿は権現造りであり、その特徴は、神様がいらっしゃる本殿、神主が作法をする幣殿、皆様が参列する拝殿の三つが一緒になった造りである。小山、御殿場では権現造りの神社が一般的。
- 神門は江戸時代から存在し、現在のものは、宝永噴火の後に再建した。門番の神様が祀りされている。扁額には「國威辰耀（こくいしんよう）」。「国の力が益々強くなるよ」という意味であり、日清戦争の時に奉納された。扶桑教から寄進されたと左下に書いてある。
- 神門の前には富士塚の狛犬は子連れの狛犬自体は珍しくなく、子供の狛犬を踏みつけているものもある。特徴は溶岩岩で作った富士塚の台座に狛犬がいる。かつ「獅子は我が子を千尋の谷に落とす」に倣って作られている。富士塚は富士山が見える地域で、富士山を遥拝するために作られている。須走に富士塚はないが、逆に富士塚を作ってその上に狛犬を載せているというのが珍しい。先ほどのことわざにあやかり、七五三やお宮参りの後で、小さい狛犬を撫でていかれる方も多い。
- 表の鳥居の脇にある信じげの滝。昔は登山者が滝で身を清めてから登山した。その名残として、滝道の表示があり、滝行をする場所があった。神社の大正時代の写真には滝はないので新しい。現在でも身を清めて富士山に登られる方、修行のために周期的に来られる方もいらっしゃる。
- 富士講石碑群。裏参道にたくさんある。裏参道は、昔は登山道の一部。ご本殿でお参りをして富士山へ登っていく参道の一部、富士山に登って神様にお礼をする時に使う参道。手水舎が二つある。表の手水舎と社殿の脇にある手水舎。社殿の脇にある手水舎の方が古いもの。ここにあれば、普通に参拝される方、富士山から戻ってきた人がすぐに手を清められる場所と考えられている。上の手水舎はすぐ脇に池がある。昔は富士山から帰られた方が、足を清めた。砂走で汚れた足を洗った場所と伝わる。裏参道は富士山に直結した場所なので、石碑がたくさんある。
- 神社の境内参道に対して左側、ご本殿の裏側は小高い山になっている。江戸時代に富士山が噴火した時に、須走の町は埋まった町の上に町を建てたというのが通説。先日、東京大学によってそれが証明された。さすがに神社は埋まった神社の上に神社を建てるのは恐れ多いので、当時の方々は神社に積もった灰をよけて復旧した。除けた灰というのが参道に対して左側、本殿の裏側に積んだ。他の浅間さんは被害を被ったところはない。須走は立地的に灰が飛んでくる地域なので特色。
- 世界遺産「富士山」構成資産碑というものがある。全部で25か所あるが、その1か所1か所に建てられている。

6. 質疑応答

ーQ. 第1部で配られたお札はどのように使うのか？

A. お守りで牛王宝印（ごおうほういん）という。山岳宗教では神社やお寺が発行しお守り、お札のようなもの。財布やカバンに入るよう現代風にコンパクトにしてある。本来は、A4位の和紙に、表書き、黒い方を写していた。こちらは折って使うか、そのまま貼り、お守りにもお札にもなる。当社では、社頭で販売ではなく、御縁の証としてお配りしている。お守りとしてお持ちいただければ。黒い方、右から富士、左が山さん、中心は東口と書いている。東口の下に、お猿さんである。富士山が出現したのは申年という伝説があり、御縁年という。申年に富士山に登ると縁起がいいと言われ、60年に一度の庚申の年に登ると、33回富士山に登っただけの御利益がもらえと言われている。また、山の神様のお遣いが猿。木花咲耶姫（コノハナサクヤヒメも）、大山祇命（オオヤマヅミノカミ）もお遣いが猿である。須走御師の小松宮司の小松家の牛王宝印、左端に東口御師小松坊善大夫という文字が刻まれていた。北口も東口の御師も一つのデザインではなく、御師によってデザインが違う。